



画像診断を考える 第2版 よりよい診断のために



編著：西村一雅
南 学
下野太郎

学研メディカル秀潤社
2014年4月刊行
A5判 376ページ
定価：本体3,200円(税別)

2003年に初版が刊行された『画像診断を考えるよりよい診断のために』の第2版である。編者は当代きっての読影の達人、西村一雅、南学、下野太郎先生の3名である。初版の序には、「アンケートを用意し…優れた診断医の先生方のコツや本音を聞き出したい…診断のテクニックにとどまらず、より大切かと思われる心の使い方に関して何うことを狙いました」とある。5月の連休にパラパラとページをめくり読み始めると吸い込まれるように一気に読み上げるようになった。執筆者のほとんどを存じあげており、皆さんの画像診断への熱い思いが随所から伝わってきて、読み物としてもとても面白い。

本書は3章から構成されているが、第1章の「General Radiologistへの道」が本書の根幹である。

西村先生は画像診断医としての立ち位置をしっかりとつこと、画像診断の現状と将来に対しては、人手不足の中で無理な長い戦線を張って補給線がズタズタになるのを放置するのは、かつての日本軍とイメージがダブるとして警鐘を鳴らしておられる。

下野先生は画像診断に至る自分なりの理屈や仮説を立てること、そしてその繰り返しが記憶を深め、診

断センスを磨く上で重要であると述べておられる。

南先生は画像診断における格言13(その多くはご自身の経験に基づく)を軸に、画像診断医の心得や自己学習の方法を紹介されている。例えば格言11「ほんの少しの努力を毎日続けることで自分自身を鍛えよう」では、学会で書き留めるメモは“これだけノート”を作ることとを披露し、症例カンファレンスに出席した後は2日後に診断名だけで良いのでそれを書き出して記憶に留めることを推奨している。

その他、アンケートに答える形で、他の達人からも蘊蓄のある言葉が続く。松木 充先生は忙しい日常診療の中にあって、あらかじめ論文を読む時間を週に2回確保しているという。また、上田浩之先生は働きやすい読影環境の作り方のアンケートに答えて、「仕事なので楽しみとかやりがいを求めすぎないほうが良いと思う」と、核心をつく指摘をしている。

第2章は「Subspecialistへの道」で、第2版で新たに設けられたが、執筆依頼が800文字に制限されているのが惜しい。小山 貴先生が「病理」の立場から subspecialty について述べておられるが、文字制限を無視して自由に書かれており、興味深い読み物となっている。第3章は「本・雑誌・ネット情報」の紹介で、いわば本書の付録であるが、画像診断を自己学習する上でお勧めである。

第2版の序に「若手画像診断医の学習の良き指針となることを目指した」と記されてあるが、若手に留まらず、どのステージの画像診断医にとっても、良き指標となる含蓄のあるメッセージが満載である。どの達人もこんな秘密を披露してよいのかというような内容が惜しげもなく綴られている。自分が若手の時にこのような本に出会っていれば、画像診断医としての人生も変わっていたかもしれないと悔やまれる一冊である。

(東京慈恵会医科大学放射線医学講座 福田国彦)

